特集

水の文化楽習プログラムを考える

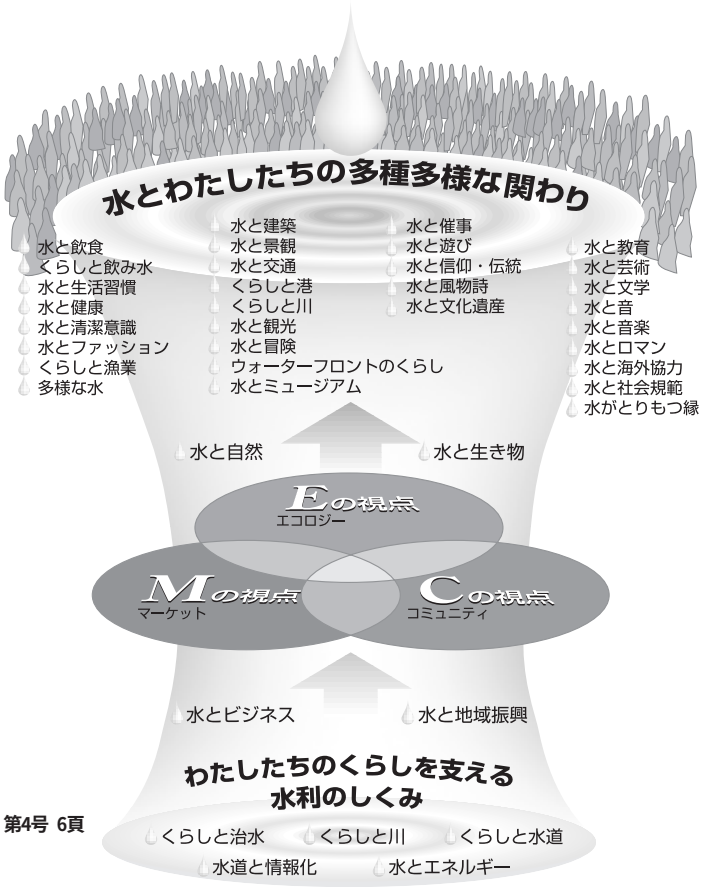
人々は「E―エコロジー」「M―マーケット」「C―コミュニティ」の視点を組み合わせ「水の文化」をイメージし解釈している―これが、昨年の自主研究「くらしと水の多様な関係」（機関誌『水の文化　第4号』）で得られた仮説でした。

今回はこれを踏まえ、当センター流の「水の文化」の捉え方の見取り図に取り組んでみます。そして、この「水の文化」をできるだけ多くの方々に伝えるための手だてについて考えてみたいと思います。しかし、それを教育というといかにも堅苦しい。私達が望むのは、都市や各地域で、家族や子供達が水をモチーフにしたプログラムで、交流を育み、歴史を刻んでいってもらうことです。そのためには何よりも楽しいこと―つまり「遊び」の要素が重要と考えました。そこで、こうした楽しい水の文化が広がっていくプログラムを「水の文化楽習プログラム」と名付けました。

このプログラムは、生態系における水のみを重視するものではありません。つまり、今の日本で使われている意味での「環境教育プログラム」とは違います。また、私たちは、都市と地方の関係を、連続した一つのものとして考えています。都市が地方に依存しているように、地方も都市に依存しており、その多様な関係は神経網のようです。この複雑な関係の中で水を重視することも重要です。

当センターがこれまで「人と水とのつきあい」という言葉で表してきたことは、生態系における水と社会システムにおける水の両面を、歴史と空間、そしてそこに暮らすひとの視点から捉えようということと言えます。

水の文化楽習プログラムは、こうした意味での「人と水とのつきあい」を楽しく伝承し、交流していこうという実践的な活動術というべきものです。こうした視点から活動が行われている例はけっして多いとは言えないようですが、少しずつ「水の文化」を伝えることの重みが認知されつつあることも事実です。当センターでは、今後、水の文化楽習プログラムづくりに取り組んでいく予定ですが、まずはじめに、今回はこのプログラムの考え方をご紹介いたします。



「水の文化」第4号 6頁

水の文化楽習プログラムとは

水の文化へのこれまでの取り組み

「水とひとのくらしとの関わり、すなわち水の文化を『水と交流』『水と生活』『水と心』『水と共生』という四つの領域で捉え、『ひとがどのように水とつきあってきたか』について検討する」。当センターでは、このような視点から水の文化をできるだけ広く捉えてきました。

たとえば、創刊号で取りあげた「香川の溜池の配水慣行」や、3号で取りあげた「筑後川の淡水取水」は、それ自身、土地独特の水の文化であると同時に、水という共有資源のためにいかに関係者の間で協力していくかという、共有資源管理の、ホットな話題の実例でもありました。

また、創刊号と第5号で取りあげた「舟運から見る都市の水の文化」は、川・海や舟運がいかに都市の構造や住宅のしくみ、すなわちひとびとのくらしに影響を与えてきたかということを追跡した、「都市における水の文化の解釈学」ともいうべきものでした。

このように「水の文化」は、生活とすべての面で密接に結びついているものです。このため、社会システムにおける『水』の役割（マーケットとコミュニティの視点から捉えた水）と、生態系における『水』の役割（エコロジーの視点から捉えた水）を、歴史・空間・そこに暮らすひとの視点から総合的に捉えることが必要なのです。

水の文化楽習と環境教育の違い

では、この「水の文化」。具体的にはどのように伝えればよいのでしょうか。

水の文化は人、もの、出来事などに埋め込まれています。表1に挙げる様に、私達は水の文化に関わるさまざまなアイテムに囲まれて暮らしています。それぞれのアイテムには人・もの・出来事の情報が埋め込まれています。これを、歴史・空間・ひとの視点から掘り起こし解釈していくのです。

例えば、現在「川」をテーマにさまざまなプログラムが作られています。「川で子供達がシャケの稚魚を放流」「川辺にビオトープ作り」「上流の森林ハイキング」……。これは生態系としての川をさまざまな側面から捉えているわけです。一方、わたしたちは社会システムの側面からもアイテムをイメージ・解釈し、眺めています。社会システムの中で「川」は別の顔を見せてくれます。交通路、物流路としての川、治水施設、水道の取水口、排水口。川の周囲の土地利用。河川敷を利用したレクリエーション。川を巡る言い伝え……。これらは歴史の時々での川との関わりの中で作られたものとして捉えることができるでしょう。時間がたつと、個々のアイテムの関係も変化しますし、社会システムと生態系との関係も変わってきました。川というアイテム一つとっても、こんなにも

おもしろい情報が埋め込まれ、それらが相互に網の目のように結びついているのです。

これらをともに次の世代に伝え、考えてもらうプログラムは現状ではあまり見られないようです。生態系における水、社会システムにおける水をそれぞれ独自に扱うものが圧倒的に多いのです。このため、水の文化を形作る数多くのアイテムのそれぞれの関係を、横断的に考えるプログラムも少なくなっています。

表1は、本誌第4号に挙げた水の文化に関するキーワード一覧です。身の回りのアイテムをどのように切り取るかが腕の見せ所です。

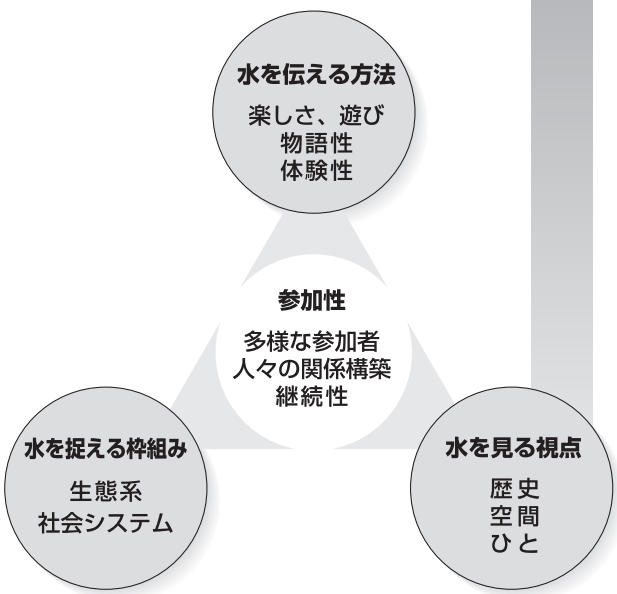
表1　水の文化に関するアイテムのキーワード一覧

キーワード（五十音順）	記事の掲載内容例
ウォーターフロントのくらし	臨海都市、海岸
くらしと川	川、流域
くらしと漁業	漁業、養殖、漁村保全、漁師
くらしと水道	上下水道、井戸、水源涵養林、雨水利用
くらしと治水	ダム、堰、河川修復
くらしと飲み水	浄水器、水質浄化、魔法瓶、雨水利用、ミネラルウォーター
くらしと港	港町、ヒットソング
多様な水	深層水、イオン水、水の栄養
水がとりもつ縁	漂流物、雪などを通しての交流
水と遊び	釣り、ヨット･カヌー等、海水浴、潮干狩り、スポーツ、テーマパーク、水遊び
水とエネルギー	発電、節電
水と生き物	魚、昆虫など水と生き物、水と生き物によるまちづくり
水と飲食	酢、酒、寿司、茶、ミネラルウォーター
水と音	水琴窟、漏水、鳴き砂
水と音楽	ヒットソング、音楽
水と海外協力	水質浄化・淡水化等産業協力、ＮＰＯなど多様な団体の海外協力
水と観光	流氷、潮干狩り、温泉、川床、クルーズ、水晶の洞窟、氷筍、雪の大谷
水と教育	自然の教育力、環境教育、資格（ビオトープ管理士、気象予報士）、マナー教育
水と景観	親水空間、景観、公園、景勝地、噴水
水と芸術	絵画、写真、水中写真、演劇、彫刻、オブジェ、染め物
水と健康	温泉、治療、癒し、プール、スポーツ
水と建築	庭園、都市空間、噴水、雨水利用、実験住宅、橋
水と交通	くらしと舟運、河川舟運、災害時の代替輸送、船、運河、航路
水と催事	イベント、シンポジウム、祭礼、スポーツイベント、懸賞催事
水と社会規範	マナー、慣行、法律
水と自然	環境保護一般、森林保全
水と信仰・伝統	宗教行事、祭礼、婚礼、沐浴
水道と情報化	下水道管の利用
水と生活習慣	入浴、トイレ、洗濯、銭湯
水と清潔意識	トイレ（蛇口、洗浄便座）
水と地域振興	水を利用した地域おこし、まちづくり
水とビジネス	商品、開発、サービス業（銭湯など）
水と風物詩	灯篭流し、笹舟、祭、川床、ひな流し、山開き、漁解禁
水と文化遺産	建築遺産、遺構、史料、無形文化財、自然遺産
水と文学	文学、俳句、川柳、活字資料
水とファッション	容器のデザイン（飲料水、酒）、つけ涙、化粧
水と冒険	雪原、カヌー、ヨット、丸木船、水泳、海底調査
水とミュージアム	水族館、様々な水を題材にした博物館
水とロマン	探検、文学、旅行、漂流物

水の文化楽習プログラムづくり

それでは、「水の文化楽習プログラム」とはどのような要素を満たせばよいのでしょうか。本センターでは下図の様な四つの切り口を考えています。

「水を捉える枠組み」「水を見る視点」の他に、「水を伝える方法」としての楽しさ、その結果いろいろなストーリーやイメージを膨らませる物語性。そして、できるだけ多く、多様な方々が継続して交流できる「参加性」。こうした要素を満たしたプログラムを創りあげていきたいと、当センターでは考えています。



各地の楽習活動を、次号より取材・連載してまいります。

「自分達の活動を紹介したい」、「こんな活動をしている団体がある」等、楽しい情報を当センター東京事務局までお知らせ下さい。皆様からのご連絡をこころよりお待ちしております。

電　話　03（5762）0244
FAX　03（5762）0246

水の文化 楽習プログラムの創り方・遊び方

はじめの一歩

楽習プログラムづくり―それは、人をまきこみ、楽しませるシナリオづくりです。何が楽しいのか自分がわからなければ、他人に伝えられません。これから始まるのは、「自分の住むまち」を題材に想定した、ある物語です。

水の文化センターの研究スタッフAと、今は高校の教師になっている大学時代の同級生B、そして、地方でまちづくり活動に参加し、今はそこのNPOの事務局長になっているCが、久しぶりに会って居酒屋で話し込んでいます。

A　このあいだ、こんな手紙をもらったんだけど、どう答えたらよいか困っているんだ。知恵かしてくれない？

> **Q**　はじめまして。私は、ある地方都市で小学校の教諭をしています。子供達に何とか自分たちのまちの自然や文化を伝えたいと思うのですが、具体的にどうしたらよいかわかりません。良い方法を教えて下さい。

C　ふーん、いまだにこんな質問が来るのか。こんな質問を手紙にする前に、まず、思い立ったが吉日。街の中をぶらついてみればいいんだよ。「何をするかテーマが決まってから」「目的を決めてから」…こんな重苦しいことを考えると動けないからね。

B　でもさあ、自分も教師だから、この質問の意味はよくわかるよ。「環境教育」が大事ということで本屋に行って事例集を見てみるんだけど、これがつまらないんだ。(笑)　それと、こちらとしては、生徒の親や地元の人を巻き込みたいと思うんだけど、お互いなかなか忙しくて時間がとれない。積極的な先生は、地域のリーダーになりそうな人たちと日頃からコンタクトして活動しているけどね。

C　NPO活動をしていく時の基本は、まず地域にどんな資源があるか、その洗い出し。目的は分かっても、実現するための資源がどこにあるか分からないとそこで活動はストップしてしまうからね。自分達も、学校の先生や商店街の人たち、お医者さん、老人会、行政の人たち、多くのボランティア、大学の先生、いろいろな人達と組みながら、子供や親向けの社会教育活動をよくするけれど、意外と自分が住んでいる街のことってみんな知らないよね。水道はどこの川から来ているのか、排水はどこへいくのか、井戸がまだ使われているのか、どこにあるのか、あのうっそうとした林はいつからあるのか、昆虫が少なくなっているように思うけれど本当にそうなのか、住居の形態は他と違うのか、家同士のつきあい方は現在とどう違うか…いくらでも調べることってあるんじゃないかな。

A　フィールドワークの整理や、企画のアイデア出しをする時に、思いついたことや記録をメモやカードに書いて、よくまとめるけど、そういうのは使えない？

C　よく使うよ。自分ならまずこうするな。お医者さんが患者のカルテを書くように、いま自分たちの街がもつ水の文化は何があるのか、書き出してカード化してみるといいよね。「水の文化カード」だ。いわば、まちの水の文化資源データベースだ。

**　そこには、たとえば、「船着き場」なら、船着き場と題名を入れて、いつからあって、誰が作って、昔はどのような使われ方をしていたとか何でもいいから書いていくわけ。それと大事なのは、そのことについての情報源。たとえば、「昔は、ここから渡し船が出ていた」なんていう話を聞いたら、それが何歳の誰から聞いたか。あとは、それ**

たということは
距離が離れたということ？

化カード

場所　松江市内

太郎（38歳）二郎（8歳小学校2年）親子で記入

デジカメ記録

を活かした
城の立地

。

んで、

こと。

ない。

があることを聞く。

という。今度調べてみることにする。

水を活かした
まちづくり

町で育った
は どのように描写されていたのだろう

について詳しい人。たとえば、ある学校の社会の先生が専門的に舟運史を研究しているとか、市の博物館の学芸員の人が詳しいとか。これらを書いておくと、水の文化に関する「もの、人、こと」の情報源データベースになるわけだ。

B　それを生徒たちと探検してまとめてみると面白そうだな。いや、生徒だけではなく、生徒の家族も一緒にできそうだな。カメラももって、写真も貼り付けてみるといいな。やはり、大勢の人間でやった方がおもしろいよ。

C　そうそう。自分達のNPOは、会報発行の他に、メーリングリストももっているから、お父さんお母さん達がそこで井戸端会議をやっている。そこで、そういう情報をみなさんから募集するという手もあるよね。ホームページで、みんなが撮った写真を公開してもおもしろい。

A　ウンウン。その通り。でも、そこまでなら、ただの調査だよね。それを、どう楽習プログラムにしていくわけ？

C　そこが腕の見せ所さ。「自分たちの街の水の文化を伝えていこう」とかまずテーマを立ち上げて興味をもった人を募る。そして第1回のミーティングを開くんだけど、そこで必ず「飲み食い」をする。やっぱり人間って、食べてリラックスすると、なぜかお互いの信頼関係が何となく生まれて、頭が回転し出すんだな。そこで、おもむろに、みんなで集めた水の文化カードを大きいテーブルの上に並べて、わいわい、がやがやしゃべりながら、「これとこれはつながるね」「これは私の田舎の船と形が違う」「じゃあ、こんどそこへ行ってみようか」とかね、「調べたものを、商店街の人たちにもっていったら、来週の商店街のイベントで掲示板を出すから、貼って発表してくれ」なんていうのもあるしね。

A　なるほどね。つなぐことが大事なわけだな。テーマもそう。人もそうだね。

C　そう。一人で調べるならこつこつ調査勉強すればいいんだよ。でも、思いがけない発想とか、活字になっていない情報を発掘するには、やっぱりみんなでわいわいやりながら、情報を共有していくことが必要なんだな。そういうことをやると、次の調査の時は「分かっていて質問する」ことになるから、相手も余計に興味を持って聞いてくれることになる。

B　それよくわかるな。それと、教師の立場から一言いうと、わいわいやりながら楽習すると、人によって気づきがある。これは年齢関係なし。おもしろいことに、お年寄りの方から同じ話を聞いても、生徒に報告させると、個人によってニュアンスの置き方が違ってくる。当然だよね。いままで何となく、頭の中でもやもやしていたものが、話を聞いて考えてみることではっきりと気づくようになる。このプロセスが本人も面白いんだね。だから、最初から「カリキュラム」をかっちりと決めるとだめね。むしろ、気づきのプロセスを大事にして、「おもしろければ途中でどんどん変更しよう」ぐらいの気持ちで臨むと、長続きするんだろうな。

A　世代をつなぐことも大事なんだな。

C　そう。なんとなく地域の人たちが世代を越えてつながってくる。すると、だんだん活動が盛り上がってくるんだ。

ポイント1
フィールドワーク　カード化
【フィールドワーク】
まず、みんなの情報を文字化して共有しよう。人によってこんなに解釈が違うのかと驚くはず。

ポイント2
みんなで楽しく、組み合わせる
【テーマのデザインと気づき】
ここでブレーンストーミング。カードを見た思いつきをどんどん書いてアイデアを出し合おう。

ポイント3
とにかく、つなぎまくる
【ネットワーキング】
テーマをつなげる、人をつなげる、できごとをつなげる、とにかくつなぎまくる。すると、いろんな関わり合いが生まれ、グループが活発化する。

なぜ？　観光化され
生活と舟運の

水の文

件名　堀川の遊覧船

調査日：2000年 7月27日　メンバー：林

内容（誰に聞いたか、何を調べたか、気づいた点）

・水都松江を象徴する堀川の遊覧船に乗り、
　船頭さん（58歳）からお話をうかがった。

・松江城の周囲の内堀と、外堀の
役割を果たしていた
京橋川・米子川・四十間堀川を通り、
約50分で1週している。

・運行が始まったのは1997年1月。
　意外と新しい。
今は、年間乗降客50万人を越える
観光名所となっている。
始まる前は、かなり水が汚れていたとのこと

・途中、船一隻がやっと通れる橋の下の
小さなトンネルを、8人位の乗客が全員かが
くぐったのは面白かった。

・川からの眺めがきれい。
これを活かした景観が守られ、
まちづくりが活発。

・昔は堀をたくさんの船が行き交っていたとの
小泉八雲邸も川のすぐ側。
八雲も同じ風景を見ていたのかもしれ

・船頭さんから「ホーランエンヤ」という祭り
松江大橋のあたりにたくさんの川船が集まる

水

どういう意味？

ギリシャの島に生まれ、英国ダブリンの港
小泉八雲の作品に、水都松江の風景